💎シンポジウム「多様な視点を活かして進む～ニューノーマル時代に輝く女性研究者とは？～」

第6回 合同シンポジウムは、事業の最終年度にあたり、リーダーシップ向上やキャリアアップに関する講演会に、本事業の取り組みの一つである研究力強化支援により採択された研究者の成果発表会を併せ、オンラインで開催しました。

田中雄二郎(東京医科歯科大学)、新井一(順天堂大学)両学長による開会挨拶で始まり、来賓の板倉康洋氏(文部科学省 科学技術・学術政策局 局長)より、近年、我が国の民間企業の女性研究者の割合は2020年度に16.9%まで上昇しているが、諸外国と比較するとまだまだ低い水準に留まっている。大学の女性教員の割合は、教授の方は17.8%、准教授は25.7%である。2020年12月に第5次男女共同参画基本計画が定められ、更なる努力が必要となっている。政府全体としては、次期科学技術・イノベーション基本計画の3月の策定を目指している。文科省としても女性研究者の活躍促進に関する内容が充実したものとなるよう、引続き取り組んでまいりたい。このシンポジウムを契機に皆様の知見・ノウハウの共有が図られ、各機関・各分野における一層の充実がなされるよう期待している、とのご挨拶をいただきました。

基調講演は、本事業の外部評価委員であり、東京医科歯科大学のご出身でもある大隅典子氏(東北大学副学長(広報・共同参画担当)より『アカデミアにおける女性活躍推進のために心がけたい小さなヒント』と題し、無意識のバイアスを払拭すべく、様々なデータをもとにご講演いただきました。

2012年から2019年までの科研費採択率をみると、2014年を除き女性の方が高い値であり、学際研究トップ10%論文の比率(ドイツの例)では、女性が参画している論文の方が、無参画の論文よりも高い値となっていることからも、フェミニズムやジェンダーに関する活動が福利厚生や慈善事業と考えられては宜しくない。社会を良くする、組織を強くするには、女性がもっと輝いてほしいと思っている。米国新大統領を支えるメンバーのように、男女の閣僚が50:50に近づくためには、女性を据えようという意識をかなり強く持つことが大切である。また、女性の就業率は増えたが、上位職は少ない。例えば、フィリピンでは女性の就業者自体は少ないが、女性の管理職は多い。これは、生物学的にみて女性が管理職に向いていないということではなく、社会的・文化的な背景によるものではないかと考える。研究分野に女性が少ない理由の一つに、家庭と仕事の両立の難しさが挙げられる。子どものある男女のうち、8割以上の女性が、男性よりも3時間ほど多く家事労働を担っていることがわかっている。夫に週末の家事・育児時間が全くない家庭は第二子に恵まれず、6時間ほど費やしている家庭では、9割ほどが第二子に恵まれるとのデータがある。日本人男性の労働時間はイタリア人男性の2倍超であるが、倍も働かずとも国は存続できるし、女性が働くと子どもが少なくなるわけではない。また、米国のトップ・オーケストラにおいて、1970年代では男性が組織の95%を占めていたが、ブラインド・オーディションを行ったところ、女性の一次審査の合格率が5割上昇し、2000年の女性奏者の割合は25~46%になった。数学のテストの例では、学籍番号だけを書く、学籍番号と名前を書く、更に性別にチェックを入れるかどうかでスコアが変わるという研究結果もある。

子どもの頃からの刷り込みや、様々なプレッシャーによらず、男女ともに持って生まれた才能を生かせればよいと望んでおられ、東北大学のたくさんの取り組みや、意志決定機関に関わる女性を増やすことの重要性を、豊富なデータによりお示しいただきました。

次に、宮﨑泰成氏(東京医科歯科大学 学生支援・保健管理機構長)より、本事業の6年間を総括していただきました。

……

後半では、研究力支援成果発表が行われました。

●荒川聡子講師(東京医科歯科大学 難治疾患研究所 病態細胞生物学分野)

『新規オートファジーの発見とその整理機能の解析』

2種類あるマクロオートファジーの各機能の解説、新規オートファジーの発見など、研究の過程と成果を発表いただきました。「研究支援員配備事業という大学のバックアップに支えられたことは大きな励みとなり、コロナ禍における子育てに前向きになれた。そして、勤務時間をフルに研究に注ぐことができ、成果につながりました」

●湯浅磨里氏(東京医科歯科大学 生体材料工学研究所 薬化学分野 助教)

『疾患変異型リアノジン受容体を標的とした研究において、リアノジン受容体のサブタイプRyR1,RyR2,RyR3のうちRyR2に着眼したカルシウム誘導性カルシウム放出活性を阻害する新規化合物の創製』(順天堂大学との共同研究)

「リアノジン受容体RyR2およびRyR1に豊富な実績を持ち、不整脈や心疾患メカニズム解明に精力的に取り組んできた順天堂大学のグループとアカデミア発の医薬開発経験のある東京医科歯科大学薬科学の化合物合成グループがタッグを組むことで、新規不整脈治療薬の開発実現への道筋を示すことができました」

●千葉麻子氏(順天堂大学 医学部免疫学講座 准教授)

『腸管在住自然リンパ球(MAIT細胞)を標的とした免疫疾患の制御法開発』(東京医科歯科大学との共同研究)

共同研究の流れ、協力体制や共同研究の意義を含む実施状況、研究成果、目標達成状況、今後の展望等をご報告いただきました。「同時進行でいろいろなプロジェクトを進めていくにあたり、効率よく実験ができるよう、情報をシェアすることを心がけました」

●藤﨑ひとみ氏(株式会社ニッピ バイオマトリックス研究所 課長)

『I型コラーゲンゲル上培養によりヒトガン細胞に誘導されるEMT様転換の解析』(東京医科歯科大学と大阪医科大学との共同研究)

課題の背景、結果、考察、目標達成状況、共同研究の意義を含む実施状況、今後の展望、研究業績等をご報告いただきました。「女性目線を活かした研究という視点よりは、性差をことさら考慮しなくてもよい研究ができる社会になったらよいと思っています」

●遠目塚千紗氏(株式会社ニッピ バイオマトリックス研究所 課長代理)

『トリペプチド X-Hyp-Gly を高含有するコラーゲン加水分解物の摂取が生体の骨代謝および脂質代謝にもたらす作用の研究』(東京医科歯科大学との共同研究)

「研究を進める中で、全てが想定した結果になるとは限らず、実験の進め方に関しても複数の意見が出ます。チームで方針を定めて一緒に出発したならば、“誰が言った”はなしにして、その道のりとゴールに対し、主体性と責任を持つことが重要と考えます。時には方向転換や中止も生じますが、リーダーであれば、徹頭徹尾研究の舵取りをしていくべきだと思います。昔ながらの報連相を活発・丁寧に行うこと。“前に言った”もなしにして、その都度、情報を整頓し、相互理解を深める心がけが必要だと思います。個々の尊重のもと、チームが進んだ先に成果が生まれれば、これほど素晴らしいことはないと思っています」

……

今村聡子氏(東京医科歯科大学副学長(事務総括・男女共同参画担当)・事務局長)より、この事業では様々

な取り組みを連携機関と共に進めてきました。この制度を利用した研究者が羽ばたいているという実績が見えてきており、そばで支えている同僚や上司、様々な方々の歩みの積み重ねにより今があります。更にこの歩みを発展させなければいけないと実感しています。また、それぞれの研究の内容や実施状況を非常にいきいきとお話しいただけました。研究者同士のつながりもきちんと根づき、成果が生まれており、喜ばしいことと思っています。今後もこのつながりをより強化させていくよう進めていかなければなりません。と総括をいただきました。

それぞれがリーダーシップを発揮しながら研究を進め、若手研究者のロールモデルとして活躍する姿を発信する機会となり、服部俊治氏(株式会社ニッピ バイオマトリックス研究所 顧問)のご挨拶により閉会しました。